「雨を活かすまちづくり50年の継承」
シンポジウム

コーディネーター	永瀬　克己	氏	法政大学教授
パネラー	野口　由紀子	氏	ＮＰＯ法人グリーンネックレス
	木俣　美樹男	氏	東京学芸大学教授
	斉藤　浩	氏	小金井市中央商店街協同組合理事長
	高橋　金一	氏	ＪＡ東京むさし青壮年部長
	稲葉　孝彦	氏	小金井市長
ゲスト	徳永　暢男	氏	ＮＰＯ法人雨水市民の会理事長
来　賓	鈴木　薫	氏	東京都環境局多摩環境事務所長

と　き　平成２０年１１月１５日（土）
１４：００～１６：００
ところ　東京学芸大学　芸術館ホール

司　会（小澤京子）　それでは、皆様大変お待たせをいたしました。準備が整いましたので、第２部「雨を活かすまちづくり５０年の継承」と題しましてシンポジウムを開催いたします。

初めに、主催者稲葉孝彦小金井市長よりご挨拶をいたしたいと思います。それでは、稲葉市長、よろしくお願いいたします。

稲葉市長　皆さん、こんにちは。（拍手）６回目の環境フォーラム、そしてこのシンポジウムにお集まりをいただきましてありがとうございます。

恵まれたこの自然環境をどのようにして次の世代に継承していくかというのは、我々に課された大きな課題ではないかと思っております。これまでの私たちのライフスタイルを変えることによって、きちんとした自然が守れていくのかなと思ったりしております。

先ほどの「８市市長サミット」の中でもありましたように、きちんと雨水を地下に戻していくということ、つまり大地があって降った雨がそのまま公共下水道に流れる又は川に流れるのではなく、雨水を活かしていくシステムをつくっていく必要があるのではないかと思います。

本日、シンポジウムのテーマを「雨を活かすまちづくり５０年の継承」とし、どのように50年間次世代へつないでいくかについて、各専門の方々にお声を聞きながら行政に反映させていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

司会　稲葉市長、ありがとうございました。

続きまして、ご多忙の中、本日ご来賓としてご列席くださいました東京都環境局多摩環境事務所長の鈴木薫様よりごあいさつをお願いしたいと思います。

鈴木薫氏　（拍手）

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました東京都多摩環境事務所長の鈴木と申します。

本日は、市制50周年記念のシンポジウム「雨を活かすまちづくり５０年の継承」にお招きをいただきましてありがとうございます。

私の事務所は立川市にございまして、多摩地域の広域的な環境行政をやらせていただいているところでございます。また、私自身は小金井市の環境審議会の委員をさせていただいております。そういった関係もありまして、今日はお招きをいただいたのかなと思っております。

私ごとで恐縮ですが、私自身も小金井市の隣接市に住んでおりまして、野川で言いますと下流域で、私の住んでいる所の市長さんもさっきスピーチされておりましたが、そんな関係もございます。

きょうのシンポジウムのテーマは「雨を活かすまちづくり５０年の継承」ということでございます。今さら言うまでもございませんけれども、水は命の源であり、私たちすべての生物の生存基盤となる貴重な資源です。地球というこの惑星に生命が誕生したのも、地球誕生後に長い年月をかけて海が形成され、その結果であります。私たちは水なしでは命をつないでいくことはできません。そういう意味からも、水というのは私たちにとって最も大切な貴重な資源の一つだと思います。

滄浪泉園（小金井市）

ところが、そのような水のありがたさというものを私たちは普段考えたりすることなく、当たり前のように暮らしていると、私自身の自戒も込めて思います。東京都水道局の資料を見ますと、都内の家庭では１人当たり１日約240リットルの水を使用しているということです。これは２リットルのペットボトルに換算しますと120本分の水を１人で１日に使っているという計算になるわけです。

一方、世界に目を向けてみますと、地球上には現在約67億人の人々が暮らしているわけですが、そのうちの18%、数にしますと約12億人の人たちがきれいで安全な水を飲むことができないそうです。私自身、非常に認識不足で恥ずかしい話なのですが、世界中でこんなに多くの人たちが深刻な水問題に直面しているということを、実は最近まで知りませんでした。

数年前ベストセラーといいますか、話題になった本で『世界がもし100人の村だったら』という本を読んで知ったのですけれども、そのときは非常に大きな衝撃を私自身も受けましたし、我が国がいかに水に恵まれた国であるかということを改めて感じた次第です。

私たちの住むこの日本という国は、これまで経済的な面の豊かさばかりが強調されてきたように思います。実は古来、自然と共生しながら水を大切にして暮らし続けてきた、世界に誇れる文化を持った国だと思います。

『水と緑と土』という著書で有名な富山和子さんという方がいらっしゃいますが、その方によりますと、日本の文化の大きな特徴は、木を植える文化だということをおっしゃっております。西欧が森林を切り開くことで文化を育ててきたのに対して、日本は木を切っては植え、植え継いで緑を絶やさなかった。木を植えることで文化を育ててきた国だったと著書の中で指摘されております。私もまさにそのとおりだと思います。

我が国の国土の約３分の２が森林です。これは先進国の中でも飛び抜けて高い数字です。我が国の先人たちは、長い年月をかけて、狭い国土の中でなおかつ急峻な地形という非常に厳しい条件の中で自然と折り合いをつけながら山には木を植え、豊かな土壌と水をつくり、雨水を上手におさめながら、その恵みを普くすべての人たちが享受することができる文化を築いてきたと言えるかと思います。昨今、生物多様性という環境面で改めてその価値が見直されております里山文化はこの典型例だと思います。

我が国には、自然の恵みである水を活かし、自然と上手につき合いながら水を治め、土をつくり、緑を育ててきた、他の国には見られない独自の歴史と文化があるということ、これは世界に誇れる我が国独自の水と緑の文化だと思います。

ただ、残念なことに、経済の高度成長や、

産業構造やライフスタイルの変化など、また経済のグローバル化が進むなどさまざまな背景の中で、今申し上げました里山に限らず、中山間地の人工林から身近な緑まで、

野川で遊ぶ子どもたち

以前のような形で維持していく、守っていくということは非常に困難になっているということも厳然たる事実です。

一方で、全国各地で里山を再生する取り組みであるとか、あるいは身近な水辺に親しむ取り組み、この会場のロビーでも野川のいろいろな地域で活動されている流域連絡会の皆さんとか、あるいは野川自然の会の皆さんとか、さまざまな団体の活動が紹介されておりますけれども、そういった形で多くの市民の皆さんが参加する形で、あるいはＮＰＯや市民が主体となって積極的に進められているということも注目すべき大きな動きであり、こうした取り組みが本日のテーマであります雨を活かすまちづくりにもつながるものであると、非常に重要な意味を持つものではないかと思います。

ここ小金井市は、東京という大都市にありまして、玉川上水あるいは国分寺崖線が育む湧水、野川の流れなどに代表される豊かな水資源に恵まれ、水を大切にしながら長い歴史の中で育んできた人々の暮らしや豊かな文化があります。これは小金井市の貴重な資源であり、財産であると思います。

一方で、都市化の進展の中で水資源を取り巻く環境が大きく変わってきていることも事実であります。皆さんご案内のとおり、一度通水が途絶えて復活したとはいえ、現在の玉川上水の水はかつてのような多摩川の原水ではありませんし、崖線の湧水量も長期的には減少傾向にあり、湧水を集めて流れる野川の水涸れや降雨時の水質の問題などがあることも事実であります。

そうした中で、小金井市は市の環境基本計画の中で地下水、湧水、河川の水循環を回復する取り組みを重要なテーマとして位置づけまして、小金井市の地下水及び湧水を保全する条例に基づく取り組みなどさまざまな取り組みを積極的に進めておられます。とりわけ、先ほど来話題になっております雨水浸透ますの設置事業につきましては、今年で20年を迎えるとのことですが、設置率は50％を超え、世界一の設置率だと伺っております。この取り組みは、各方面から注目されまして高い評価を受け、さまざまな賞を受賞されているということは、皆さんご案内のとおりだと思います。

私ども東京都では、条例に基づきまして地下水の揚水規制を行っているほか、東京都雨水浸透指針や東京都湧水等の保護と回復に関する指針を策定し、東京の名湧水57選を選定するなど、市区町村と連携した地下水涵養や湧水保全の取り組みなどを行っているところであります。

最後になりますが、ご存じの方も多いかと思いますが、アメリカの先住民の格言に「自然は祖先から授かったものではなく、子孫から借りているものだ」という趣旨の

格言があるそうです。雨水から得られる恵みである水資源についても、全く同じことが言えるのではないかと思います。

先ほどの８市市長さんのサミットを、私も会場の後ろのほうで拝聴させていただきましたが、雨を活かすまちづくり50年の継承宣言に深く感銘しますと共に、各市長さんたちの取り組みに対する熱意が伝わってまいりました。宣言でも触れられていますように、雨という天の恵みを貴重な水資源として活かしていくためには、地域に暮らす市民の皆さんをはじめ多くの皆さんに、この取り組みの大切さを理解していただき、市民、事業者、行政、学校など関係者の連携、協働の輪を広げていく、このことがとりわけ重要ではないかと思います。

これから始まりますシンポジウムが「雨を活かすまちづくり50年の継承」の取り組みに向けた有意義で貴重な第一歩となることを心から願いまして、私のごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

司会　鈴木様、ありがとうございました。鈴木様には客席にて見守っていただきたいと思います。どうぞ目の前にございます階段をご利用くださいませ。ご降壇をお願いいたします。

どうぞ皆様、いま一度大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

（拍　手）

司会　それでは、「雨を活かすまちづくり50年の継承」と題しまして、シンポジウムを始めていきたいと思います。

本日の進行をお願いしておりますコーディネーターの永瀬克己法政大学教授をご紹介いたします。

それでは、私から永瀬様にバトンタッチをいたします。永瀬様、よろしくお願いいたします。

永瀬克己氏（コーディネーター）　ただいまご紹介いただきました法政大学デザイン工学部建築学科の永瀬克己と申します。よろしくどうぞお願いいたします。（拍手）

きょうは、このようなシンポジウムを行うに当たって、パネラーの先生方と打ち合わせをしようということで、先週予定を組んでいたのですけれども、皆さん、11万人のキャンドルナイトですか、それがあるということで、なかなか忙しくて打ち合わせができずにここまで来てしまいました。パネラーの方々とは本当にここでぶっつけ本番にやらせていただくということで、どういうことになるかわかりませんけれども、進めさせていただきたいと思います。

テーマは、先ほど来、８市の市長さんがお話をされておりますけれども、「雨を活かすまちづくり50年の継承」ということで進めていきます。まず僕のほうで５分間ということなのですけれども、５分だと何も話せませんので、資料を用意させていただきました。このような「雨を活かすまちづくり50年の継承」ということで８ページほどの資料なのですけれども、用意しておりますので、これをごらんになっていただければわかるかと思います。

最初は雨というイメージ、それをどうとらえるのかということで映像を本当に少しですけれども用意しましたので、それを見ていただければと思います。それでは、お

願いいたします。

（スライド）

先ほどは市長サミットの中でこの地球の写真をわざわざ持ってこられた方がおられました。やはり地球というところから物事を考えなければいけないということだろうと思います。これは人工衛星からの写真ですけれども、上のほうに日本列島が映っており、雲が流れていますが、海の面積が大きい。地球の水の97%が海で、残りの水、人間が使える水は３%以内ということですので、ものすごく少ないということです。よって、それをどのように活かしていくのか、大事に使えるのか。この地球を見ていくと、ここには国境も何も見えない。「つながっている」ということです。

次をお願いいたします。雨は天空から落ちてくる水滴であるということですね。これは、境界線など分け隔てなく、どこにも降ってきます。降らないところもありますけれども。

雨が落ちてきますと、水のところにはこのような波紋が出てきますね。雨を象徴するような造形であるかと思います。

この波紋が、波紋を投げかけるという言葉にもなっていますが、次々と広がっていきます。

それから、今この映像を見ていきますと、水鏡というのが出ます。水は平面をつくります。そうしますと、そこに周りの景色を映し出します。それは鏡のように景を映し、こういう世界というものも水を通して客観的に感じられるということがわかるかと思います。

これは公園の一角に水たまりができているところです。葉にたまった雨が雫になり、水たまりの上にぽつん、ぽつんと落ちてきます。そしてジワッと地面の中にしみ込んでいくという風景です。

これは激しく落ちる水です。昨年、今年と集中豪雨がありましたけれども、激しく落ちる水というのはこういう姿を呈します。

雨というと、こういう風景がすぐ思い浮かびますね。「傘を差す」ということです。これもまた雨の風景としてなかなか風情があるのではないかと思っております。

ちょうど今ごろですね。枯葉が落ちてきて、そこに雨が降って水たまりができ、それが時間とともにしみ込んでいって、太陽が上がってくると消えてしまうというようなことですね。蒸発するとともにゆっくりと地下に浸透していく。

ここに水たまりができている、これをイメージしておいていただければと思います。

これはことし、ボルネオの民家調査に行ったときの風景ですね。日本だとカヤ葺きなのですけれども、ボルネオではパームヤシの屋根です。そこに雨が降って、雫がたまり、それがぽたりぽたりと落ちてくる。これが光輝いてすごくきれいでした。

これは夜の風景ですけれども、水たまりがありますと、周りの景色を映すということで、ここで色が出てきています。

こういう雨を地中に浸透させるということで、小金井市の雨水浸透ます設置率は世界一ということはいいことですよね。先ほど８市の市長さんが集まってくれましたけれども、やはり世界一ということでリーダーシップをとっているということがあるので、即、参じてくれるという感じがいたし

ました。

これは南国で、夏ですと毎日のようにスコールが来ますが、このような雨がドーット落ちてきます。

水が豊富ですが、それでもやはりこうやって軒の下のところにバケツを置いて、雨水を集めているのですね。たまると、それをポリタンクのほうに移して、大事に使っています。雨水はおいしいということのようですね。

これは子どもたちが雨の中で遊んでいる風景ですね。日本ですと、このような風景は、昔はあったのかもしれないのですけれども、今は余りない。雨を楽しんでいるという光景です。

こういう滴ですね。先ほど「水の一滴は血の一滴」という市長さんの話がありましたけれども、この一滴がいろいろなことに効いてくる。

この水が今度は緑を育んでいる。

それで、命を育むということで、水の中の生物もそうですし、このように子どもたちが「命」だとかそういうものを感じる体験ができる。これが野川です。

このように雨というものを活かして、どういうまちをつくるのか、モノをつくるのかということで学生に課題を出しました。これはコラージュ法による「雨の楽校」ということで、その課題回答が提出されたものです。

雨の楽校、学校の学が「楽」になっていますけれども、楽しみながら学べる、そういう学校ができないかということでつくられた学生作品です。屋根が先ほど提示した傘のようなイメージでつくられている。そして軒先から細い線が出ており、滴がそこを伝っていく。キラキラ光って落ちていくのが見える。中にギャラリーがあったりもちろん教室があったりするということです。

これはクローズアップしたところです。

ということで、これは一例の作品でしたけれども、こういったものからまず雨とは何だろうということをイメージしてとらえ、それからディスカッションしていきたいと思っております。

それでは、パネラーの方々を紹介したいと思います。それぞれの立場から自己紹介を兼ねて、自分にとっての雨を活かしたまちづくりのイメージについてお話をいただきたいと思います。それでは、私の隣からでよろしいですか。では、野口さん、よろしくお願いいたします。

野口由紀子氏　グリーンネックレスの野口と言います。ちょうど10年前中央線が高架の鉄道になるということで、まちの真ん中を走っている鉄道が高架になるとまちはどんなに変わるだろうかというイメージから、私たちはグリーンネックレスという名前でまちづくりの活動団体を立ち上げました。

今、グリーンネックレスの主な活動は雨をテーマにしていますが、最初から雨をイメージしていたわけではなくて、高架化された鉄道に降る雨を何とか活用できないだろうかということでした。中央線が高架鉄道になってコンクリートの柱がたくさんできるのなら、武蔵野の大地の中を真っすぐ走ると、ひょっとしたら緑の一里塚とか何

か、グリーンネックレスという名前にふさわしいような、玉川上水に匹敵するような何か歴史的なものができないだろうかというイメージだったのです。

団体を立ち上げた当時、沿線６市の市長をお招きして公開サミットを行い、小金井市長もご出席してくださいました。そのころは雨の涵養というのはなかなかなじまなかったのですが、この10年間の活動を経て、この土地が雨水の涵養域で、東京の水がめになっていることがわかってきました。小金井市がこのことを宣言してお隣の市に働きかけることができた場面に、私自身が出席できましたことを大変感謝いたします。市長、どうもありがとうございます。

さて、大変美しい映像をたくさん見せていただきましたが、雨も一滴では美しいものですが、たくさんになると閉じ込められるイメージになるなど、とても厄介なものです。

今、私たちの活動では、10年前には考えもつかなかったＬＥＤというたった３ワットで100ワットの電球の明るさがだせる新技術の発展に目をつけ、一滴の雨がたくさん集まったら発電もできるということを課題として、去年小金井市内の鉄道高架軌道の雨樋を１本使わせていただき、約10メートルの高さから落ちる雨で発電しＬＥＤを発光させる実験を行いました。

もう一つ、土の部分が大変少なくなっているので、水やり不要のプランター栽培を公開実験しまして、現在は商店街にも設置し、水やり不要で美しい花を咲かせています。

永瀬氏　ありがとうございました。ＬＥＤが随分発達してきて、小さい電力でかなりの効果が出るというものですね。そういう実験をやられているということです。

それでは、木俣さん、お願いいたします。

木俣氏　スライドをお願いできますか。

東京学芸大学環境教育実践施設の施設長をやっております木俣と言います。私はキビなどの雑穀類の栽培起源と伝播の研究をしています。それと同時に、環境を学ぶということはどういうことかについて研究していますので、現在の専攻は民族植物学と環境教育学です。日本各地で、あるいはインド亜大陸や中央アジアなどの山村でフィールド調査を続けてきました。

私は日本環境教育学会、雑穀研究会、および学芸大学探検部をつくり、環境教育推進法をつくるように政策提言もしてきました。その中で現在最も力を入れているのは、多摩川上流の山村、小菅村のエコミュージアム日本村で植物と人々の博物館をつくるということです。この活動の中で環境学習中堅指導者の養成をすることに一番力を入れています。

私どもは、今日もご紹介しましたように、４年計画で文部科学省の現代教育ＧＰ、持続可能な社会づくりのための環境学習事業を実施しております。11月４日の講演会で「冒険探検と環境学習」という講演会から始めまして、昨日のプレシンポジウム「食農教育と環境学習」、本日の午前中は「第２回多摩川エコミュージアム・ネットワーク・シンポジウム」までを一連の事業として開催してきました。さらに今日ここで小金井市の50周年記念の「８市長サミットと

シンポジウム」が行われますし、明日は小金井市環境博覧会も盛り上がって連携させていただき、多くの経験交流ができるものと思っています。

（スライド）

さて、このような一連の流れというのは、実際に雨水の流れに沿っているものだと思っています。秩父多摩甲斐国立公園の山々に、あるいは小金井のまちに降った雨は、野川などの支流や伏流水を経て多摩川に合流して、東京湾に流れ込んでいきます。この水は流域のすべての生命をつないでいると思います。水がなくては植物も動物も私たちも生きていくことができません。この余りに自明なことを、私たちは日々忘れていて、感謝もしないで、自然や、あるいは私たちの祖先の生活文化や環境文化をないがしろにして、率直に言えば欲望の命ずるままにその日を暮らしていると思います。これは良いことではないと思います。雨水を土に戻すとか、川、海から山、まちに、私たちの家庭や身体に循環させるためには、森林や農耕地を大切にしないといけないと思います。

こうした当たり前のことを学ばないと、私たちはいずれ生きていくことができなくなります。でも今日、学ぶ場所、あるいは機会もほとんどなくなってしまいました。都市文明というのは、目先の便利さと引きかえに、過去から、あるいは未来への命の学びというものを断ち切ってしまうわけです。だから、今日、環境学習が殊さら必要になっているのです。とりわけ「種子から胃袋まで」、さらには消費とか廃棄、循環ということ、こうしたことは文明を崩壊させないための最も基礎的な営みだと思います。

私は食農教育フォーラムの副代表というものをしておりますけれども、環境学習の中で農耕と食文化の重要さを実践するためには、必ず作物の栽培、加工、調理を講義の中に織り込んで実践しているところです。

スライド、ありがとうございました。

どうもありがとうございました。（拍手）

永瀬氏　ありがとうございました。

それでは次に、斉藤さんですが小金井駅前の商業のほうをやっておられます。お願いいたします。

斉藤氏　武蔵小金井駅の南口の商店街の理事長をさせていただいております斉藤と申します。よろしくお願いいたします。何となく雰囲気がちょっと硬くて、余り慣れない場所なものですから、どういうお話をしたらいいのかなと思っています。皆様は非常にまじめに雨水をきちんと土の中に戻してというお話でしたが、商業者の立場から言いますと、雨は比較的厄介なものです。雨が降ると皆さんは、傘を差しますので手に荷物が持てなくなり、お店に入らずに真っすぐお家に帰られるため、雨の日は売り上げが下がってしまうということが商売上ございます。雨を楽しむとか雨を利用するということは、なかなか雨が降った当日は難しいというのが現実です。したがって、雨をどうやって利用して大切にしていくかということについて普段は余り考えていなくて、ここでだんだんと考えていかなければいけないなとは思

っております。

それというのは、小金井市も駅前再開発という時代になってまいりまして、ただ、これがどういう影響を地域に与えていくのかということを考えて、小金井のまちが今後どういうまちであったらいいか、あるいは活気のあるまちであり続けるためにはどういうことをやっていかなければいけないのかというのを商業者で夜集まったりしていろいろ話をしております。小金井市は南に武蔵野公園、野川公園、野川、そして北に小金井公園が非常に大きな財産としてある。それら自然を守りながら、人に来ていただくようにすれば、駅前を必ず通っていく。それをどうやって商売に結びつけていくかは、それぞれの技量によるわけですが、これら水と緑を大事にしていく。豊かな自然を大事にしていくことが、自分たちの商売を守る上でも、大規模小売店が駅前に来ても、違う魅力のある場所を提供することができるのではないだろうかと、商工会等の中でみんなで話をしております。ところどころに魅力のあるポイントやお店が在ったり美術館が在ったりというようなこと、あるいは道がきれいだったりということを含めて、南北の大きな公園を結ぶ回遊路をつくっていくことが、ひいては自分たちの商売にも必ず役に立つと考えております。

皆様すでにご存じかもしれないのですが、我々の商店街で深井戸を掘りました。これは深さ100メートルの井戸なのですが、今飲める水が出る井戸というのは非常に少ない。水道の水とはやはり違った味でございます。勝手に雨水を利用させていただいているのですが、これが商店街、あるいは地域のマグネットになっていくのではないかと思いで掘らせていただきました。浅井戸の水は一般細菌ですとかそういったものが入って、なかなか飲めないので、100メートルほど掘って検査をしたところ、幸い、水質基準に適合ということでした。今、市民の方を含め約2,000人の方が利用登録され、毎日ペットボトルを持って汲みに来られております。

商売上の利用でも、うちではゼリーに使っていますし、おそば屋さん、あるいは喫茶店、一番多いのが飲み屋さんでお湯割り、水割りにお水に使うため、大きいペットボトルを持って毎日汲みに来る人もいます。少なからぬ地域への貢献という意味で、水は非常に大きな魅力があるのだなと思っております。市内で何カ所もたくさん汲むと、涸れてしまい地盤沈下をするのではないかと皆さん心配されるのですが、東京都基準で１日に最大20トン、平均10トン汲んでもいいということですので、ペットボトルで汲んでいる範囲ではなくならないだろうと思っております。

小金井の地名の由来ということで、豊富に湧く水ということをキーワードにしながら、地域の活性化を進めていけたら非常に楽しい、あるいは魅力のあるまちづくりができるのではないかと、商業者も今みんなで回遊路づくりを含めて進めていきたいと思っております。

先ほどちょっと野口さんのほうからお話のありました水やりの要らないプランターですとか、雨水の貯留タンクもうちの商店街の一部に飾らせていただいて、雨水利用のＰＲというような形で一緒にやらせていただいています。そういった地域と一緒にやっていくという感じを出すことも商業と

しても必要なのかなと考えて、これからも頑張っていきたいと思っております。

自己紹介を以上で終わらせていただきます。

永瀬氏　ありがとうございました。

それでは次に、高橋さん。農業者の立場からよろしくお願いいたします。

高橋金一氏　皆様、こんにちは。農業者を代表して参りましたＪＡ東京むさし青壮年部長の高橋金一と申します。８市サミットの中で野口府中市長から、川崎平右衛門という名前が出ていたかと思うのですが、実はその川崎平右衛門さんが今の関野町２丁目に住んでいたのです。その隣の家が我が家でございます。私の先祖も、江戸時代の新田開発から、歯を食いしばりながら地面に張りついて生き残ってきた“小金井のインディアン”の一人でございます。

その中で、今日皆様に発表したい内容としては、まずテーマである雨を活かすまちづくり、これはまさしく我々が長年、農政運動という形で活動してきた、農あるまちづくりというものと非常に関係する内容ではないかと思いながら、今日この場所に来ております。

ただ、その農地というものは、雨を考えますと、雨が降ったものが、そこを浸透して地下水になっていく。また、ヒートアイランド現象の面からみると、土から蒸散していく、また農産物から水蒸気となって蒸散していくことによって気温を下げるという環境的な利点があります。ただし、多量の雨が降ってしまうと、さすがに農地であっても農産物に被害が起きてしまうわけです。でも、洪水対策の面でみると、農地に多くの水が集まることによって農産物は犠牲になりますが、住宅地の洪水を防ぐというような効果もあると私は考えております。

そういう多面的な機能がある農地も、小金井、三鷹、小平、国分寺、武蔵野の５市の農協が集まりＪＡ東京むさしができた当時は管内農地面積が約1,000ヘクタールありました。それが10年たった今では720ヘクタールほどになっておりまして、280ヘクタールが宅地化されてしまいました。数字的に言うとわからないと思いますので、これを例えますと、立川にある昭和記念公園、それと小金井公園、井の頭公園、この３つを足した面積と同じ面積の農地が10年で消えていってしまった。市長の話の中にもありましたとおり、東京都全体でも同じような現象が起きておりまして、非常に速いスピードで農地が宅地化されていっております。

我々農業後継者としては、なぜそういう現象が起きてくるのか、継承していく側の人間としていろいろと研究し考えた末、最終的に気がついたのは都市化です。これは昭和40年代に線引きがされまして、それから以降、農地というものは宅地化予備軍という位置づけで都市計画の市街化区域での位置づけがされてきました。あわせて、農地の相続時には非常に過酷な税法が待っています。要するに、都市の中に農地を残せない状態、法制度も含めたそういう制度が農地を残せない最大の原因ではないかという思いで、今、多くの方々にお願いをして、

何とか都市の中でも農地が継続できるような状況にしていただきたいというお願いをしております。

今日お越しの皆様も含め市民の側からもそういうような声を出していただき、最終的には財務省がうんと言わなければこういう問題は解決しないようでございますので、ぜひとも大きな力でそういう部分を解決し、緑豊かな農あるまちづくり、また雨を活かしたまちづくりができるような状況をつくっていっていただきたいと思っております。

私から１枚のこういう資料を皆様のお手元にご用意させていただきました。これは私が東京都の都市農業検討委員であったときに委員会でまとめた報告書の概要を引用させていただきました。この中に大体のものは書いてありますので、後ほどごらんになっていただければと思います。

また併せて、これはホームページですので、コンピューターがお使いになれない方はちょっとごらんになるのが難しいのかもしれませんが、ぜひ参考に見ていただけると現状がおわかりになるかなと思います。農地法も含めていろんな法律が2011年を起点として見直しがされます。農地法も含めて、また我々にとって農地を継承する生命線ともいえる農地の相続税納税猶予制度を含めた相続税法が、手直しされます。政局が非常に不安定で、結果がどうなるのかわかりませんが、市民の皆様が自分たちのまちをどうつくるべきか、市を通じてそういうことを大きな声を出し合うことによって、自分たちのまちは良くなると、私は信じております。

そういうことも考えながら、農を活かして、農業を通じて市民の皆様に少しでも貢献できるのではないかと、考えながら自己紹介にかえさせていただきます。

どうもありがとうございました。（拍手）

永瀬氏　ありがとうございました。相続の問題は、かなり大きくかかわっているかと思います。

市長さんは先ほどからずっと話されておられるので、次の方に跳ばしていただいてよろしいでしょうか。

稲葉市長　ありがとうございます。

永瀬氏　それでは、地域は異なりますが市民という立場から徳永さん、よろしくお願いいたします。

徳永暢男氏　皆様、こんにちは。私は墨田区の隅田川のほとりの小さな下町に住んでいる徳永と申します。商売は雨水屋です。タンクを売っております。並びにＮＰＯを持ちまして、雨水市民の会というのを全国ネットで皆さんに呼びかけて、雨水の活用、利用など雨に関するいろいろなことを皆さんと考えながら進めております。

私が住んでいるのは隅田川のほとりなのですが、運がいいというか悪いというか、関東大震災、また大東亜戦争にも焼け残りました。住んでいる者としては、ああ、よかったなと思っていたのですけれども、今の時代になってみると、４メートル道路もない、それこそ昔の言う１間半、９尺道路ぐらいのところに木造住宅がずらっと並んだ貧乏長屋の多い地域です。もしも災害が起きたらえらい大きな火災が起こるのでは

ないか、そうなったときに備え何とか自分たちの力で災害から強いまちにできないかと、まちのみんなで語り合いました。

その中で一番怖いのは、やっぱり火事じゃないか。燃えたら全部財産がなくなってしまう。では、それを防ぐには何が必要なのかをみんなで語り合っていく中で、水があれば火を消すことができるのではないか。

すごく立派な消防自動車をつくった。水道局もしっかりした配水ができた。しかし、いろいろな地震の被害を聞かせていただいていると、大概電気は切れてしまう。水道管はパンクしてしまった。阪神であれだけ大きな火が出たというのも、水がなかったからだ。では、どうしようかと考えたのが、各まちの角々ぐらいに雨水を貯留する貯留タンクと井戸ポンプ、手押しポンプを置くことです。それで火がでたら防ぐことができるのではないかと、みんなで考えてでき上がったのが、路地尊という雨水利用の一つで、役所も関わり完成しました。雨水の利用をもっと一般の人にも知ってもらいたいと思い、日本全国のタンク屋さんの組織でつくったのが雨水利用事業者の会です。今日も私の仲間なのですが、ここのロビーに雨水貯留タンクの展示をしております。私もその会に関わっておりますので、通称“雨水タンク屋”と名乗っております。

雨水が利用できるということは、溜めてみて、その水をこれから何に使おうか、飲み水にしよう、打ち水にしようというのは、それぞれの皆様のメンテナンスの中で考えていただくと、水というものは集めれば集めるほど、管理がよく行き届けば行き届くほど、きれいに溜ってくれます。

そういうようなことを私がやり出したのは、もう20数年前になりますか、小金井のまちで「柳川堀割」という映画をやるから見に来いよというお呼ばれがありまして、見に来たのがきっかけで、小金井の皆さんと仲よくおつき合いすることができるようになりました。私の第二のふるさとが小金井ではないかと思っております。ひとつよろしくお願いいたします。（拍手）

永瀬氏　ありがとうございました。５人のパネラーの方が自己紹介を兼ねて、今までやられてきたことをお話しくださいましたけれども、市長さん、跳びましたが、市民としてでもよろしいですし、市長さんとしてでもよろしいですし、いかがでしょうか。

稲葉市長　地元小金井市長の稲葉でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今、皆さんからいろいろなご発言を聞いて、皆さん頑張ってくださっているのだなという思いになっております。そういう意味でも、行政もきちんと役割を果たしていかなければいけないなという思いであります。

よく天気が続くと「いいお天気が続きますね」というのは、これは商業者にとっていいお天気なのかなと、農業者にすると大変だなというところもあったりして、何が本当にいい天気なのだろうと思ってしまうこともあります。雨が降るときは雨が降る、寒いときは寒い、暑いときは暑いというのが一番いいのかなと思ったりしています。

発展途上の国等に旅行したりすると、水というのが非常に大事にされます。生命の

もとですから、水が大事にされるわけですが、果たして私たち日本人が水を大事にしているかというと、非常に無駄な使い方をしているのではないかと思っております。降った雨をそのまま公共下水道に流し、それが汚水処理されて川や海に流されるということを繰り返しているわけで、雨水はもっときちっと大切に使っていく必要があるのではないかと思っております。

今、小金井市の水道水は、60％を超える部分が地下水であります。約20本、200メートルの深井戸からくみ上げた水を市民の方々に飲んでいただいているわけで、その量はできるだけ多くしたいというのが市民の願いでもあります。小金井の水はおいしいというのは、その辺に起因するのだろうと思います。これからも雨水を浸透させることによって、それをくみ上げて飲料水として使えるようにしていかなければならないと思っています。

先ほどの８市長の集まりでも申し上げましたが、小金井市では雨水浸透ますの設置が５万基を超え家屋の50％を超えてついているということから、設置率が世界一と言われております。数々の賞をいただいたりしているわけですが、スタートは市民の方々の運動から始まったわけですね。市民の方々が雨水浸透ます等を設置し実験したわけです。本来下水道は漏れてはいけないわけで、雨水ますに穴をあけて漏らすというか、浸透させるというのは、まさに画期的なことだったなと思っております。

新築家屋などを建てるときは、雨水ますは浸透性にしましょうとお願いしたところ、市民の方々、特に下水道工事業者の方々のほとんど100％の方々がそれに乗って

前原小貯留タンク

いただけ、それが雨水浸透ますの普及につながりました。市民の方々のご理解があって、下水道工事業者の方々の勧めや環境団体の方々の研究等々、その力こそが小金井市の雨水浸透ます設置率が50％を超えるということにつながったのではないでしょうか。

最近、市の下水道課に、ゲリラ豪雨に耐えるための雨水浸透ますの取材が多く来ております。関西等からも取材に来ます。30ミリ対応とか50ミリ対応とかという形でまちをつくっていくわけですけれども、ゲリラ豪雨は今や１時間に100ミリ以上降るというような状況で、もう到底対応できない訳です。地下に雨水の涵養というのではなくて、ゲリラ豪雨の施策とし雨水浸透ますをつけたらどうかという発想なのです。

確かに結果として、各家庭が雨水浸透ますをつけることによって、洪水を防ぐ役割も一部分果たしています。過日ＮＨＫテレビを見ていましたら、千葉県市川市で洪水を防ぐ目的で浸透ますが増えてきているとのことですが、小金井市とは目的の違いが

あっても、結果は同じことになると考えます。特に、都市部において雨水浸透ますの普及をしていってほしいなと思います。

今日、８市市長が集まっていただきましたが、小金井市が先駆的な役割を果たしてきたなと思っておりますが、こういう事業は小金井市だけでなく広域的にやらなければならないということから、地域が連携してこの事業に取り組んでいく必要があるのではないでしょうか。

今、徳永さんのほうから墨田区のお話がありました。小金井市でも貯留タンクの補助金制度を導入しています。しかし、なかなか手を挙げてくれる人がいなくて、ちょっと残念に思っています。

屋根に降った雨を、そのまま雨水浸透ますで地下にかえすだけではなく、雨水貯留タンクを置いて雨をかり、タンクの水を庭の散水や花、木の水やり、洗車に使用するというようなことに活かし、そして余った水を地下にかえす等資源として利用をしてはどうでしょうか。

本日ご出席いただいた８市の公共下水道はほぼ完備している状況と思います。家庭から出る雑排水・汚水とまちに降った雨は下水道の合流管で下水処理場まで運ばれ処理をしています。

降った雨は、別に処理しなくてもいいのですが汚水と混ざっていますので残念なことにお金をかけて処理をします。今後は、生活から出る雑排水・汚水はそのまま処理場に運び、降った雨は川に流すなり、貯留、浸透させるという分流方式をとっていかなければならないのだろうと思っております。

今、小金井市では再開発や区画整理をやっていますが、この区域に降った雨は多孔管といって、塩ビの管に孔がたくさん開いているものですが、その管の周りに砕石を敷く。砂ではなくて砕石を敷くことによって浸透能力が高くなり、パイプを流れる間に地下に浸透していくという方法をとっています。

開発区域の雨水をできるだけ地下に浸透させるという方法をとっていますので、ぜひ期待していただきたいと思いますし、これからは道路に降った雨や道路に集まってくる雨水なども浸透させていきたいと思っています。すでに、十数か所に道路雨水の浸透施設を設置していますがこれを増やしていきたいなと思っております。できるだけ降った雨を大切に使っていくようにしなければいけないなと考えます。

先ほど高橋さんから農地の話が出ました。今、ほとんどコンクリート、アスファルトになってしまっていまして、地下に水が浸透しにくい状況です。そういう意味でも農地の果たす役割は大きいだろうと思います。農地を守っていくには、税金の問題、後継者の問題など難しい問題があるわけですが、この環境を守っていくということに対しては農地の必要性は非常に大きいだろう、そんなふうに考えております。

永瀬氏　ありがとうございました。６人のパネラーの方からいろいろ問題点なり、これまでやられてきたことのお話がありました。市長さんのほうからは、雨水浸透ますが世界一ということですけれども、まだまだそれは足りないということですね。民地の面積がかなりあって、あと農地、それから道路がありますので、そこのところがすべて浸透させるということになればすばら

しいなというところです。

それでは、このシンポジウムでは先ほど８市の市長が集まりまして、雨を活かすまちづくりサミット宣言ということで、宣言をされました。その宣言の中で、「まちは一つであり、行政の枠にとらわれないでつながっていこう」ということ、そういったお話も先ほどパネラーの中からもありました。

それから、２つめの「雨は資源」であるということですね。資源ということで、それを最大限活かす、利活用するということです。

それから３つめは「行政の連携」ということで、これも先ほど確認されました。

そして４つめが、「より多くの連携と継承」ということで、まちづくりにかかわって、行政の連携だけでは足りなくて、そこに暮らす人々と、学校だとか地場産業を担う方々であるとか、そういった方々も一緒になって50年先を見詰めていかなければいけないということが宣言されました。

この宣言をもとにして、小金井市ではどういった活動がこれから50年先を見詰めたポイントになるのかということを、ちょっと難しいと思うのですが、お話しいただけますか。どういう順番でいきましょうか。では、野口さん、お願いいたします。

野口氏　私は市民の代表としてここに座っているのですが、私も33年前に四谷から中央線を使って引っ越してきました。お正月休みの終った５日でしたが、引っ越しなのでまずお掃除をするわけですね。水道の蛇口をひねったら、給湯器がまだなかったのに、水が温かかったのです。えっと思い聞いたら、ここは井戸水がたくさん入っているのだと。今まで四谷のビルに暮らしていましたので、はあ、井戸水だったら温かいのねと…。

私はなぜ四谷から郊外に越したかったかと今思いますと、金魚が死んだ時に、金魚を埋葬するところがなかったのです。そこで植木鉢に金魚の死体を埋めたわけですが、ちょっとこれって違うんじゃないかなと思いました。赤ちゃんが生まれ散歩をする時に、堀とか赤坂離宮とか街路樹に恵まれた大変美しいところだったのですが、やはり土が全くなくて、校庭もコンクリートだったのですね。私が育ったのは地方でして、土があるところで暮らしたいという強い思いがありました。ちょうど子どもが１歳になるので、ビルで暮らすよりは緑があるところで暮らしたいと思っていました。

たまたま私の連れ合いに小金井公園でロケの仕事が入り、帰りに不動産屋で何か物件がないか見てきてほしいと言いましたら、ちょうど小さな平家が見つかりました。大変いい公園があるそばだよというのが決め手となって、小金井に住むことになったのですね。越した次の日、冬でしたがお天気がよかったので散歩したら、日だまりがあることと、農地があって、小さなところの土ではなくてみずみずしい生きた土があるというのが第一印象でした。本当は、子どもが育ったら四谷に戻りたいねとは言っていたのですが、人は最後には土に返るので、土のあるそばで暮らせて、土のそばで死んでいく。私は、今年に還暦を迎えますが、ここで暮らしてきて大変よかったなと思っています。

木俣さんがおっしゃいましたように、土を活かして、風景というのはオブジェでも

ないし、それは自然の中で自然がつくってくれるものなので、そういう水、土、光など、全てを満たしたものが周りにあるという環境が大変大事なのではないかと思うのです。

そこで、市民である私たちもささやかな土を守り、乾いた土にしないように絶えず努力してつないでいけて、それを子どもたちにも伝えていけたらいいと思いました。グリーンネックレスのスローガンも「つなごう！武蔵野の土と水と緑」ということになっています。私たちもだんだんと自分の時間ができてきましたので、なおさら土への愛おしさというものを日々語り合えたらと思っています。

永瀬氏　ありがとうございました。

それでは、土ということが出ましたので、土に関連しますと高橋さんと木俣さんですけれども、木俣さん、土づくりをやられているということでお願いいたします。

木俣氏　　（スライド）

お配りしている資料で、雨を活かすためにということと、地域と連携するということでお話をしております。私自身は、この大学に就職しましてかなり長くいますけれども、２ヘクタールほどの畑の管理をずっとしてきております。そこには雨が降りますし、今スライドでお見せしております私どもの環境教育実践施設も、屋根に降った雨を全部集めて、小川や池に流しております。人工の小川であり人工の池ですが、多くの方がもう何十年も親しんでくださっていて、もともとあったと信じている人もいます。

地域とのおつき合いの中で例えれば、ごみ対策課のコンポストの試験をやっていた

東京学芸大学環境教育実践施設

だいております。そこでできた野菜は、今日、明日、私どもの環境教育実践施設の畑に行っていただきますと、そちらで差し上げています。

本年は野川に田んぼができて、お米がとれました。私どもの田んぼでも環境市民会議環境学習部会の子どもたちがやはりお米をつくっています。両方のお米を使ってお餅つきを今日午後から行っています。いろいろなおつき合いを近隣の学校、保育園や市や市民の皆様方としております。

もう１つには、ハケ下にある貫井南公民館の成人大学では江戸野菜づくりという講座を開催して、私どもの畑を使ってくださって伝統の江戸野菜をつくっておられます。その野菜も、今日、明日と野菜のスープにして皆様方に飲んでいただき、交流会でも使います。

このように、できるだけ地面を残したいと私どもも心がけているところです。スライド、どうもありがとうございました。

永瀬氏　ありがとうございます。市民がかかわる。かかわりがあると愛着が出てきて、また自分でつくったものを味わうということで、より土に近づいていくということが大変ヒントになりました。

それでは、土にかかわるということでは、もうひとり高橋さん、お願いいたします。

高橋氏　市民の人たちに土に触れ合っていただく、これは我々都市に住む農業者として全国の農家の方々からお願いされている内容で、国産の農産物をどう購入していただくか、大事に守ってもらうか、それは都市の中に住む農家の人たちが多くの都市住民の方々に農の大切さを伝えていく、そういう思いで、我々はいろんな行動をしています。

練馬区では、体験型市民農園、これは加藤義松さんと白石好孝さんという方が発案して、練馬区が発祥の地になっています。小金井市では今２カ所あり、３カ所目がこれからできる、そういうような形で少しずつは広がっています。ただし、農地法の中で、これは戦後できた法律の意味合いで、自作農主義といいまして、本人が直接やらなければならない。そういう法律の壁がありまして、他人に農地を貸すことはまかりならないというような法律があります。現在でも市民農園がなかなか広がっていかないのは、この法律のせいでございまして、仮にある人が他人に貸してしまうと、次の後継者には相続税納税猶予制度を認めませんよというような壁があります。ですから、そういう壁があるので、皆様の力で何とか貸し借りができるようにしていただきたいなと思います。

その上で、そういうことが自由にできると何が起きるかといいますと、三鷹市では何とかいろんな工夫の中で、すべての小中学校に学校農園が整備されております。これは地元の三鷹地区の青壮年部、後継者の人たちの努力によって、一歩間違うと法的な問題が発生する際どいやり方にはなっているとは思うのですが、何とか子どもたちに実際の農地で実際の農作業を体験していただきたいという思いの中でやっております。

ＪＡ東京むさし

小金井市ではまだまだそこまでの努力は足りないのですけれども、一部の農家は、実際に学校教育の中で、クラス毎ですけれども受け入れるようなことを少しずつやっております。私としては、そういうものをどんどん増やしていって、大人から子どもまで小金井の農地に入っていただいて、実際に土の香りを、またそのぬくもりを体験していただくということが、きょうのテーマである水や自然というものを、自分の生活の中に持ち込めるのではないかなと思っております。

以上です。

永瀬氏　ありがとうございました。

それでは、今、法的な問題など出てきましたけれども、それについては稲葉市長さんのほうではどうでしょうか。常にそこのところとかかわってきておられるのではないかと思うのですけれども。

稲葉市長　本当に農地に対する規制というのはかなり厳しいものがありまして、今、高橋さんが言われたように、相続税納税猶予の農地ということになると、農業を続け

なければならないと。極端に言うと、死ぬまで農業を続けなければならない。逆に今度は一般の市民が土地を買って農業をやりたいといっても、今の法律からいうと、農地を買って農業をやることはできない。つまり、職業の選択の自由がその辺にはちょっとないのではないかという思いを持っています。

先ほどから出ているように、体験型市民農園などは、その法律のはざまを行くのかなと思ってはいます。市では、東町と貫井南町の２カ所に開園していますが、市民の方々が喜んでくださっています。

高齢者の方々の、市民農園などはいつも競争ということになりまして、抽選で決めさせていただいていますが、一方農業者の方々は労働力不足という現実があります。一定の年齢になると農業をやってみたいという方がいらっしゃるのですね。定年での退職者…退職しなくてもいいのですが、余っている時間に農業をやってみたいという気持ちを持つのですけれども、うまく法的にクリアできるようにしていけば、そのチャンスを活かすことができるのではと思います。

そういう意味で、都市の農地を残そうとするのであれば、大胆な法制度の改革が必要になってくると思っています。農地に関して、生産緑地等を解除するときには、市に買い取りの請求が参ります。極端ですが、相続が発生したので相続税を払うために土地を売らなければならない。とてつもない大きな土地が売りに出ますが、市では買い切れない。

農地は宅地化され分譲され、そこにはマンションが建つという形になってしまうのですね。そんなことにならなくても済むような、農地が守れる法律に変えていかなければならないだろうと考えます。

永瀬氏　そこは何か名案がございませんでしょうか。今、教育のほうで法律ぎりぎりでやられているという一例もありますけれども、50年先を見た上で、何か地方自治体のほうでこういう案というのは。

稲葉市長　一時的ではなくて継続的に。例えば行政が借りるあるいは学校が使うなどの話になれば継続して使えるわけですから、一時しのぎの話ではなく、その辺に対して法的に少し光を当てていただけるといいのかなと思っています。今、農地というのは、農業を主導的にやる人が自らやらなければならないということになっています。その人が自ら手を引き、援農ということでだれか別の人にやっていただくということになればいいのですが、自ら手を引くということにはなり得ない。どうしても高齢化してきたりすると、農地が守り切れないというのがありますが、長期的に継続的に安定的にその農地が確保されるのであれば、その辺は法律で余り縛りつけないでもらえればと私は思います。

永瀬氏　これは国とも絡んできますので、そこのところは本当に皆さんで知恵を寄せ合って、こういう新たな方法や提案を考えていかなければならないと思っています。農地が確保されれば、水の涵養ということではかなり大きく効いてくるので、都市農業というのは大事だと思いますね。そして防災の場合の避難地にもなるでしょうし、今、食の問題ということでいろいろ出ていますけれども、「地産地消」で本当に新鮮なものが食べられるということですと、CO_2

削減にもなるしこれ程よいことは他にはないと思っております。

土の問題が出ましたけれども、土とお菓子とは余り関係ないかな。お菓子をつくられている斉藤さんは、50年先をにらんでの何か小金井市のポイントはあるでしょうか。

斉藤氏　今いろいろお話を伺っていまして、商業者というのは物を売って利益を出して生計を立てていくわけですが、地域と離れては生きていけない。特に小金井という土地は、ほかのまちからお買い物に来ていただけるまちでは今のところ残念ながらなくて、ほかのまちにお買い物に行ってしまうというまちになってしまっているわけです。ここで、私自身、価値観が非常に大きく変わってきている。今までのグローバル社会だとか効率最優先、利益を最大にしていくという価値観から、だんだんと地元でもう少し家族との触れ合いだとか、自分の持つ時間を充実したものに変えていくとか、そういったことにお金を使うかどうかはわからないのですが、時間は使っていくという時代に振り子が戻ってきているような感じがするのですね。

小金井のいいところというか、今まで余り発展してこなかったものですから、一瞬ちょっと遅れていまして、遅れていたら、いつの間にか時代では先端に行っているというような感じもちょっとあって、うまくそこを利用しながらまちづくりというのが進めると、これから50年がどうかというのは別として、あと10年、20年後には小金井はとてもいいところだと。

利益を出すという面でいいところかということは別として、住んだり、暮らしをす

るまちとしては非常にいいまちだということになり得るのではないかと。

商業者としては、その中でどうやって商売をしていくかということになるのですが、先ほどから話が出ている地産地消、農業、農地がまちにあって、豊かな自然が南と北にあるということを活かすまち。回遊路の途中で、農地でもぎたての野菜があったり果物があったり、ゆっくり歩きながら、井戸水を使った喫茶店があったり、そば屋さんがあったり、美術館もあって、見ながらゆっくりとした時間が過ごせて、駅前に帰ってくる。駅前で、ちょっと一杯飲んで帰ろうかというようなことができるまち。吉祥寺あるいは立川とは全く違ったまち。団塊の世代の方たちが定年を過ぎ、ゆっくりした時間を持っていけるまち。家族とディズニーランドとかへ行くのではなくて、ハイキングというかウオーキングというか、もっと家族の語らいをしながら、昼間、公園でゆっくり楽しい時間を過ごしていく中で、商業あるいは飲食業が行っていけるのかを頭に入れながらまちをつくって、その中で農業者、芸術家、地元の緑を大事にされているＮＰＯの方々、そういったとこ

ろと連携をしながら、気持ちが豊かになれるまちというのをどうやってつくっていけるのか。

幸い、小金井には学校がたくさんありまして、木俣さんの学芸大、永瀬さんの法政大学、農工大学、東京経済大学等々を含めて、たくさんの学生さんがいらっしゃる。そういうところと連携をしながら、商業的にはたくさん売れて儲かるというまちではないかもしれないのですが、地元の自然、あるいは農産物等々を利用しながら、飲食あるいは商売がそれなりにぼちぼち食べていける、いいまちというのができるのではないかというところを目指して頑張っていきたいと考えております。

永瀬氏　地元の野菜を使って、それをお菓子にするというような試みがされていますね。木俣先生のところの農園を使って野菜をつくって、それを使っていくということと、あとは江戸東京たてもの園がありますので、その中で江戸野菜をつくって、それをイベントにしていく。そうすると、まちが楽しくなってきますよね。そうすると、斉藤さんが先ほどお話しされた回遊路、回廊ができ上がってくるということで、回廊ができ上がってくると、歩いて楽しめるまちというのにイメージがつながっていくのではないかという感じがします。

それでは、徳永さんはどうでしょうか。これからの50年先を見通したポイントというのは何かございますか。

徳永氏　今、商店のお話を聞いて「わあ、いいなあ」と。私たちのまちは本当にシャッターが軒並み降りてしまって、後継者が引き継いでいかないという寂しい商店街になってしまっています。しかし、粋でもなく、ダサイところなのだけれども、雑誌などが下町という記事を取り上げてくれて宣伝が多いものですから、皆さんは、雑誌での下町という名前のところを見てみたいというようなので…。下町といったって、本当は浅草あたりの下町のほうがいろんな食べ物などいろんなものがあるのですが、本当の職人が住みついた下町に今、学生さんがかなり入ってきているのです。家賃を安くして貸せるのですね。

ある商店街では、アパートになっていたところを商店街で３年間借りまして、その小割にした各部屋を学生さんたちに安く貸して、それぞれが勉強した美術だとか工芸だとかというものをつくる工房みたいにして、それを見せる。下町らしさというところを一つの見学コースにして、見てもらおうというようなものに今取り組んでいるところです。

また、野川のほとりから現地の野菜で何かができたというようなお話でしたが、おもしろいというか、一つのコースを楽しみで小金井に来られるということが物すごく感動しました。

私のやっているのはタンク販売ばかりですが、今考えていることは、市長さんが先

路地尊有李園

ほど言われたとおり、浸透もいいのですけれども、貯留浸透です。大気汚染のため、どうしても粉じんやばい煙が最初に入ってしまい、浸透ますの中にヘドロのようにこびりついてしまう。それが浸透し、地中に影響を起こすのではないかと言われるグループの発言を聞いたことがあるのです。ですから、できれば少しでも貯留浸透という方法をとることによって、市長さんが言われたとおり、いい水を地下に浸透させれば、よりよい水で、湧き水として出るのではないかという気がします。私たちの会でも一生懸命、貯留浸透と言っています。一度貯留して、貯留の仕方が大きいタンクじゃなくても、小さなタンクでいいのですから、一度そういうようなろ過をして浸透させていくような方法が理想ではないかと思っております。

それともう一つ、我々がやっているのは小さなタンクばかりの話だったのですが、これからはもう一つ、国にも声をかけ、大きなタンクを各家庭に置いてもらって、一番使うトイレの水に利用する。一番汚いものを、コップに入れて飲める水で流しているのは何か不自然ではないかと思うのです。私が住んでいる墨田区が中心となり設立した雨水利用自治体担当者連絡会という一つの会がありますが、その会と国、都道府県、民間、産業等の方々とネットワークでつなげようと、国交省の方々ともお話ししながら発足したのが雨水ネットワーク会議です。雨水貯留浸透に係る協会ともコミュニケーションをとりながら、一つのプロジェクトを組んで、国に提案できるようしたいと希望を抱き、取り組んでいるところです。

永瀬氏　ありがとうございます。貯留浸透というのは、どういう使い方をするわけですか。ごみをタンクのところでフィルターをかけてきれいにするということだろうと思うのですけれども、例えばタンクがあるとしますと、タンクのどういうところにそれを設置するとごみが取れるとか、そういうことについては……。

徳永氏　大気の影響というのは、最初の降り始めだけですから、初期雨水カットができれば、あとは本当に飲めるような水です。そういうことを皆さんがちょっと工夫していただくだけで、雨水を活用できるのではないかと。

私たちの会が、今バングラデシュに支援に行っています。バングラデシュというところは、天然の砒素で侵されている地域が99%だそうです。ガンジス川が年に何回も氾濫しますから、至るところが水だらけです。下水道はできていなく、トイレはみんな外でするだけですから、全部ごっちゃ混ぜになって川に流れ出して汚れていて、しかも天然の砒素でも汚染されているわけですから、その水は全部生活用水として使えないのです。地下水を利用させようと、日本からもかなり地下水のタンクを支援したそうですが汚染水で使えなかったのです。では、どうやってそれを助けられるかといったら、雨水を活用することが一番いいの

バングラデシュ貯留タンク

ではないかということになったわけです。あそこは運がいいことに工業産業がなく、大気が汚されていないのです。現地へコンクリートの雨水タンクを据えつけました。雨期の場合は、先ほどの先生の写真じゃないけれども、表にバケツや洗面器を置いても生活用水はとれます。しかし、肝心なのは乾期。乾期の半年間全然というほど雨は降らないのです。各家庭に乾期を乗り越すだけの貯留タンクを付けてあげたいと始めました。最初は、ボランティアとして無料でタンクを設置してあげたのですが、やっぱりただであげるというのはだめですね。貧しい国ですからもらえるものだという意識が強くなってしまい、いつまでも自立ができないのです。反省して自立できるよう、現在ではクレジット、要するにローンでやらせています。貧しい中からも自分でお金を出してつけたタンクには、蛇口にかぎをつけるようになりました。それは自分が苦しい中からお金を出してつくったタンクだから自分のものだと。それともう一ついい面につながったのは、メンテナンスをしっかり自分でやるようになりました。

そういうものがだんだん重なっていけばと思っています。本当は今年行かなくてはならなかったのですが、個人的に私、背骨を痛めましたので手術して行けなかったのです。今後は、1,500世帯にタンクをつける雨水村というのを向こうのＮＰＯと組みまして実行しようと企画しているところです。

永瀬氏　雨水は、都市の場合ですと、最初に降った雨水だけ処理すれば、あとはきれいな水であるというお話ですね。

エクセルギーハウスということで建築家の黒岩さんが軒にフィルターをつけておいて、最初に降った雨水をそこでフィルターにかけて、残りの水をゆっくりと利用していくというアイデアを出しておりましたけれども、それなども今後活かされるのではないかという感じがしました。

タンクですと、その位置もいろいろなところに想定できますよね。屋根に降った雨をゆっくりとおろしてやればいいわけですから、屋根裏のところに置くとか、途中の２階などのベランダに置く、それから庭先、駐車場に置くなどを考え、見えてくる場所によってはデザインも考える。そのデザインがまちのあちこちに出てくると、あっ、小金井らしいなというものになる。それが小金井の風景になるという感じがします。天水尊は墨田区でやってしまいましたので、そういう意匠ではないものを、小金井らしい何かができないかなと思っています。

徳永氏　そうですね。市長さんもいらっしゃることですから、それこそ小金井でのアイデアコンペ、先ほど表彰した傘の絵の公募じゃないですけれども、タンクをつくるアイデアを小金井で特殊なものを考えていただけると、おもしろいものができていくのではないでしょうか。降った雨を貯めるだけですから単純なので、そんなに深く考えることはないと思います。しかし、水を貯めたからといってあけっ放しのタンクにしておくと、蚊が入って隣近所に迷惑をかけたのじゃ意味がありませんから、そういうところを気配りしていただければ、ただ貯めて使えれば水の節約になるということは、誰でもがすぐわかることと思います。

永瀬氏　ありがとうございました。時間も

だんだん迫ってきましたので、これまでお話しいただいて、ちょっと言い足りなかったというようなことだとか、あとは次の世代へ向けて、こういうことは言っておいたほうがいいのではないかなというメッセージであるとか、その辺のところを一言ずついただいて締めていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

それでは、野口さんから順番にお願いいたします。

野口氏　今、徳永さんからアイデアというお話があったのですが、雨水浸透のきっかけは市民のアイデアだったわけですよね。アイデアはたくさんあるのですけれども、それをつないで形にするというのは、実は大変難しいことだというのを、私たちはグリーンネックレスという活動をとおして感じています。例えば、行政がつながるという、きょう８市がつながってここに並んだだけでも実は大変だったと思います。だから、アイデアはたくさん出るのですが、それをつないで形にして外に見せていくというのは、実は大変な能力がいることで、市民がいつもそれを、そうだよねという言葉をたくさん交わしていき、そういうアイデアの背景はちゃんと持っているというのが、今後私たちの役割かなと思いました。

余り具体的ではなく、イメージがわいてこない表現で申しわけないのですが、市民はアイデアを出し、アイデアをつないでいくのは行政で、それを実行してつなぐのは市民じゃないかなと思っています。

グリーンネックレスプランター

永瀬氏　ありがとうございました。

それでは、木俣さん、お願いします。

木俣氏　皆様方からおっしゃっていただいたとおり、小金井は緑、公園もありますけれども､たくさんの大学もあるわけです。大学は地域社会とともに成長して共生していくものだと思いますから、欧米の大学まちのように小金井も大学のまちとして世界的に評価を得られるような、そんなまちに50年先を見てなってほしいと思います。

まちの中でカフェだとかパブだとか、そういう飲み屋さんとかあって、そういったところで私たち教員や学生ばかりではなくて、市民の皆さんといろいろ気楽に挨拶をし議論をして、このまちをもっと楽しいまちにしていこう、地元の食材を使って、おいしい料理をつくって、集える場所を小金井にたくさんつくっていこう、そんなことがほしいと思います。

それからもう一つだけ、付け足しですけれども、実はここに「多摩源流水」があります。これは多摩川の一番上流の小菅村のお水です。これからは小金井のことを考えるに当たっても、多摩川の一番上流の村々のことまで、できれば頭の片隅において、環境保全･創造の輪を広げていただきたいと思います。

ありがとうございました。

永瀬氏　今飲みましたけれども、結構おいしいですね。軽いというか、そういう感じがします。

木俣氏　皆さんに小菅村の村長さんから

のお土産です。

永瀬氏　そうですか。ありがとうございます。

それでは、斉藤さん、お願いいたします。

斉藤氏　我々商業者としては、一般市民の方との接点が非常に多くて、先ほど高橋さんのほうからいろいろ法律の問題ですとか、そういったところで大きな問題があるのだということのアピールがあったわけですが、雨を活かすというところで市民の方々にはメリットがなかなか見えない。

タンクに溜めて、水洗トイレの水道代が少し安くなりますということですと、これはいいかなとなるかもしれないのですが。それが雨水、あるいは水の資源をということが自分たちのメリットとして何があるのだろうかということのアピールが必要と思います。

先ほど、回遊性の中の農業のおいしいものが食べられるのだとか、自分のまちの魅力としてそういったことが大事なことなのだということでした。商業者としても農業者、あるいは地域の方々と一緒にアピールをしていくことが重要と考えます。農地を大事にするからこういうおいしい野菜が食べられる、こういう果物が食べられるのだとか、いいまちであり続けるためには、そういうことをしなければいけないのだということを、市民全体で連携しながらやっているのだという姿をアピールしていかなければならないと。

では、市民も心の中で都市の農業を守ることが大事なのだ、それが自分たちの生活を豊かにすることにつながるのだという気持ちを持ってもらえることや、アピールする最前線というか、アピールできるのは商業者なのかなと思います。

そういったところの連携をとり、おいしいものを食べてもらい、これを続けるためにはこういうことが必要なのだというアピールを市民と一緒にできていけたらと思いました。　以上です。

永瀬氏　ありがとうございます。

それでは、高橋さん、お願いいたします。

高橋氏　私もいろんなところでこういう話をするのですが、やればやるほど、農家としてこれからも生き残るということが、いかに多くの市民の人たちに役に立つかと思っています。そういう意味では、安全な新鮮な農産物を皆様に提供する、これが第一です。

ネイティブアメリカンの人たちの言葉に「先祖からいただいた環境というものは先祖からいただいたのではなくて、未来から借りている」というのがあります。この地域は我々の先祖が血の汗をかいて開拓してきた地域ですが、これから先の生まれてくる子どもたちのためにどういうことができるのか、未来から今の環境を借りている今の農業者として、どういうことを今やるべきなのかということを考えながら、私はこれからも多くの農業者の仲間とともに頑張って生きていきたいと思っております。

ちょっとCMなのですが、来週の土、日曜日に第一小学校で農業祭を行います。小金井の農業はどういうものをつくっているのか、どういう人たちがいるのかというのを直に見られると思いますので、ぜひ第一小学校のほうにお越しいただければと思います。

ちょっと暗い話が多かったかもしれませんが、明るく元気にこれからも頑張ってい

きますので、どうぞ応援のほどよろしくお願い申し上げます。（拍手）

ありがとうございます。

永瀬氏　それでは、ぜひ皆さん、第一小学校にお出かけください。

市長さんは最後に話していただくとして、徳永さん、先にお願いいたします。

徳永氏　今日は、この会にお呼びいただき、本当にありがとうございました。それと、８市の市長さんが宣言されたことで、武蔵野の大地からの湧き水として、我々の東京の下町まできっと流れてきているのではないかと思います。こういうつながりが本当にしっかりとできることを私は望んでいます。私の仕事の中でいつでも言っている「雨水はためれば資源、流せば洪水」という言葉を皆様に贈りたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

永瀬氏　ありがとうございました。

それでは、時間が迫ってきまして、まとめなければならないのですが…市長さんがとんでしまいましたね。失礼いたしました。では、お願いします。

稲葉市長　最後ですが、降った雨をそのまま公共下水道に流して処理して、川や海に放流するというのは、非常にもったいない話だということを私たちが感じていかなければならないと思います。屋根に降った雨を貯留タンクにためて使い、余ったら地下に浸透させていく。それはゆっくりとした循環、時間をかけてリサイクルさせるということを考えていく必要があると思います。そういう意味で、繰り返しになりますけれども、雨水を有効に使う。無駄にすることはもったいないことだと考える必要があります。

これから、行政も雨水も含めて環境の保全に踏ん張っていかなければならないなと思っていますし、市民の方々と連携し、そしてさらにいろいろなアイデアをいただく中で、一緒に環境の保全に努めてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。（拍手）

永瀬氏　ありがとうございます。

きょうは鈴木さんが最後のところまで聞いていていただいたということで、ご感想などいただければありがたいなと思っています。よろしくお願いいたします。

鈴木氏　いろいろお話を伺いまして、本当に貴重なお話をありがとうございました。

最初に、私のあいさつの３分の１ぐらいが聞こえなかったようです。私が申し上げたのはデータを披露しただけなのですが、『世界がもし100人の村だったら』という有名な本の中で私は知ったのですが、世界の18％の人が明日飲む水にも苦しんでいる。12億人の数になると思うのですが。そういった中で、日本は幸いなことに水だけは自給できているわけです。１人当たり、都内で１日240リットルの水を使っているそうです。ペットボトルにすれば120本分ですね。この水を１日に１人で使っているというデータを披露したのです。

ところが、この水を東京という範囲で見ますと、多摩川からの水というのはたったの15から20％で、８割方、他県に依存しているのです。多摩川を流れている水も、実は流域下水道というのが非常に大切で、下水道ができて多摩川の水もきれいになったわけですが、調布市の鶴川街道あたりのところでは、実に生水の半分ぐらいは下水処理水なのですね。水がきれいになったの

で、アユも毎年100万匹ぐらい戻ってきているというお話も聞きますが、何か違和感を覚える部分が皆さんもあると思います。

ですから、やっぱり我々にできることは、今日のテーマであります雨水を活かすまちづくり。コンクリートで被覆されている部分が多いわけですが、緑を通じて、土を通じて大地に雨水を返していく、こういった取り組みが基本なのだろうなと。今日は、そういった取り組みで本当にご苦労されている方の課題も明らかになりましたし、いろんなヒントもいただけたので、まさにこれからの50年の継承の第一歩になるいいシンポジウムだったのではないかと思いながら聞かせていただきました。本当にありがとうございました。（拍手）

永瀬氏　どうもありがとうございました。

この辺でまとめなければならないのですが、パネラー皆さんがおっしゃったことでほぼ問題点と、それから何となく解決法も出てきたような感じがしております。

野口さんのほうからは、実践をしてきたこと、100ワットでまちづくりという、小さい電力でかなりの効果を出すもの、それも雨水を利用するというような画期的なことをやっている。効率を重視するということですと、なかなかそこまで一般化するのは難しいかと思いますが、そういうことをやっているという事実が市民のほうに伝わることが大事かなというような感じがいたします。

それから、木俣先生のほうからは、種から胃袋というようなことのお話がありましたが、本当に土の大事さというのですか、そういうところから食べるところまで、みんな係わりながらやっていく大事さ。教育ということで、伝えていくことが大事だということのお話がありました。

それから、小金井は大学のまちということで、我々のところの法政大もありますし、学芸大も農工大もありますし、近くには東経大もあります。ですから、そういった大学があるということで若い人もいますし研究者もいますから、連携をとり合いながら、よいまち、また雨を活かすまちになっていければと思っています。

法政大学も学部改革で動いており、今まで工学部と情報科学部だけだったところに今度は生命科学部というのが入ってきました。今まで人間の病院があり動物の病院もあります。ところが、植物医というのはあるのですが、植物の病院はない。植物病理学をきちっと押さえておかなければいけないだろうということで、遺伝子も扱う生命科学部をつくりました。

小金井のまちというのは植木のまちでもあるわけですね。ですから、そういったところと連携をとりながら生命を考えるということができればよい。今、小金井のキャンパスの屋上には温室がつくられ、いろいろな実験をやろうとしています。

それから、斉藤さんからお話がでましたが、井戸を掘ってそれをまちづくりにつなげていく六地蔵の井戸というのがつくられ、それがかなりの人々にＰＲ効果があって、実際にその水を使ってコーヒーとか、おいしい水割りで飲むというふうに使われている。そういう輪が広がっていっている。僕もそこにちょっと関わらせていただいて、僕のところのゼミの学生が応募し、１等をとりました。実施設計ということで六地蔵の上屋とか広場を設計させていただき

ました。学生のうちから実施設計ができるというのは、本当に一生の思い出になるということと、今後もこういう機会に対しては皆ぜひ参加していきたいということを言っていました。

今回の雨を活かしたアイデアコンペにもうちの学生が応募させていただいて、優秀賞を受賞したようで、ありがとうございます。

斉藤さんのほうは、回遊路というのですか、まちに回廊をつくっていく。それによって、よいところが何か出てくれば、小金井のまちはよくなっていくのではないか。そうすると、商業もそこにかかわった人が回遊してくるというお話だったかと思います。

高橋さんからは、すばらしいよい言葉をおっしゃっていて、ネイティブアメリカンの言伝えのように未来から借りた土地、そういうものを大事に使っていくということ。法的な問題がいろいろありますけれども、そこのところは本当に行政と一緒になって何とか残せるものに。相続が起こっても、そこがつぶされないで残る何かよい方策はないのか、そこのところは今後まだ議論していかなければならないことと思っております。

都市の中に農地が残っていると、本当に「ゆとり」というのを感じる。やはり空間がゆったりしている。それから震災ということを考えても、小金井の場合には農地とか空地が結構あるものだから、深刻な感じがあまりないところもあるのですが、それは空地があるということ自体が大事ですね。空地の「空」というのは、あいているという意味ではないのです。そこはあるべくしてあけてある。未来のためにとってあるということだと思うのです。ですから残っているということは、そういう価値観で物を見ていくということをやらないといけないということで、よいお話を伺いました。

それから徳永さんからは、路地尊で、下町の火事の怖さに対して、雨水、水があれば、初期消火ができる、最初の消火がされていれば延焼しないということで、安心のために水を使うということ、それが一つの下町の安心風景をつくっていったわけですね。

これらのことは非常に参考になりました。

そんなことから、小金井型で行く、郊外型で行くとすれば、とにかく降った水は最大限利用して、使い切って地下に戻していくということをやらなければいけないということでまとめられたのではないかと思います。

美術の森の湧水（小金井市）

降ってくる雨をすぐ下水道に流してしまうということではなくて、できるだけ経路を長くする。屋根に降ったら、そこから地面におりるまでに大分横道を通っていくことで、ゆっくりとおりていく。そうすれば、集中豪雨が来たって安心だと思いますね。そういったまち、雨を活かすまち、アメニティーのあるまちというのですか、そこに

つながっていく。

今日の雨を活かすまちづくりサミット宣言ということで、「まちは一つ」「雨は資源」「行政の連携」「より多くの連携と継承」というのが出ていましたが、これをざっと見ますと、４つのうち３つは「連携」なんですね。“つながり”を持っている。今日パネラーの方がいろいろな分野から推薦されて出ておられますが、これもつながりですね。その方が市民とつながっていく。それによっていろいろな知恵が出てくるのではないかと思っています。

人間の脳の中にシナプスというのがあります。シナプスというのは、ある問題が出てくると、その問題を解決するために、あらゆる方向の情報とどのようにつなげようかということを、瞬時に行う。そういうものなのです。そのシナプス的なものを小金井の中で実践する。「シナプス連携」（話者造語）がそれに当たると思います。それを瞬時につくっていくわけにはいきませんが、実際につくりながらアピール、問題解決の表現をしていったならば、よいまちになっていくのではないかと思いました。

長時間にわたりましたけれども、パネラーの先生方に大きな拍手をお願いいたします。

（拍　手）

永瀬氏　ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。

以上をもちまして、本日予定しておりました行事を全て終了させていただきます。

本日は、お忙しい中、最後までお付き合いいただきましてまことにありがとうございました。お気をつけてお帰りくださいませ。

なお、雨水利用事業者の会、日本雨水浸透施設工業会の展示を当ホールの入り口付近で、雨と仲良し・アイデアコンペの作品は小金井市環境フォーラム会場で展示しておりますので、ご鑑賞くださいませ。

本日、司会を務めさせていただきましたのは小澤京子でございました。本日はまことにありがとうございました。（拍手）

※カットに使用している写真は、オリジナルのほか各団体等のホームページから引用しています。